

# 閲覧ニュース

32号

1981. 12

## 開館・閉館のお知らせ

12/18 (金) まで9時～6時  
12/21 (月)～12/24 (木) 9時～5時  
12/25 (金)～1/5 (火) 閉館  
1/6 (水)～1/8 (金) 9時～5時  
1/11 (月)～ 9時～6時



## 文献複写サービスについて

- 試験期に向い、混雑が予想されます。出来るだけ余裕をもって申し込んで下さい。
- 複写物は当館の資料に限ります。ノート、レポート類や他館の資料はお断りします。
- 申し込み時間は  
午前は12時30分まで(出来上りは1時)、  
午後は4時まで(出来上りは4時30分)です。
- 複写資料に料金(1枚30円)を添え、カウンターに申し込んで下さい。

## 冬休み長期貸出

期間 12/14 (月)～1/14 (木)  
冊数 5冊まで

○ 延長は認めません。

## 提案文へのお答え

### ① 「延滞料が高すぎる」

図書館の資料は全学共有のもので出来ただけ多くの皆様に利用して頂かなければなりません。返却期限を守らないと他の利用者に迷惑をかけます。罰金制度は最良の方法とは言い兼ねますが、金額は発足当初(昭和48年度)から変わっていません。それ以前、当図書館は貸出停止の措置(1日1冊に付き、1日)をしていました。この方法ですと一定の期間、図書の帯出が出来なくなりますので、図書館の利用者にとっては大きな痛手になると思います。何事も金銭で解決出来るものではありませんが一種の便宜と考えておりますし、金額も妥当と考えます。要は返却期限を守って頂くことです。

### ② 「窓ぎわのトットちゃん 購入希望」

購入決定になり、既に排架されています。  
請求記号は916/Ku78です。

## 『巡礼の書』を巡礼して

伊藤幸子

### 始めに

糸杉とオリーブに飾られたウンブリアの重々しい山々は、無数の暗い眼のような岩穴をその深い壁の間に隠している。13世紀初頭、イタリアでも最も美しいこのウンブリア地方の一都市アッシジに生まれた一人の若者が、これらの岩穴に隠れ棲み、苦行と祈りによって、その魂をはるかなる神の許へと通わせた。それから700年後、一人のデンマークの詩人がこの苦行者の跡を慕い、最後にはイエス・キリストの受難の聖痕を身に受けることによって、キリストと同じ聖性にまで高められることになるこのアッシジの聖者フランチェスコが、厳しい求道の旅の道すがら足を留めたゆかりの場所を、もう一度我が足で辿ることを試みた。J. J. ヨルゲンセンの『巡礼の書』（1903）は、この巡礼の旅の記録である。

敬虔なプロテスタントの家庭に生まれ、コペンハーゲン大学に学び、パリやルーヴェンで美学を講じたこともあるこのデンマークの詩人は、生い育ったプロテスタントの風土にも、長じて影響を受けた自然主義やフランス



の象徴派にも、魂の安住の地を見出すことを得なかったと言う。このような飢えたる魂を駆り立てて、フランチェスコの遺跡の巡礼に赴かせたものは、一体何であつたのだろうか。彼が心の糧として求めたフランチェスコ精神とは、どのようなものであつたのだろうか。この旅人の足取りを追って、ウンブリアの深く峻しい山を経めぐりつゝ、僅かなりともこの気高い魂の消息に觸れることを希うものである。

詩人はローマを発つと、リエティ溪谷の岩壁に燕の巣のようにへばりついている、小さな修道院に先ず足を留めた。聖フランチェスコが本物の飼葉桶の傍でクリスマスを祝ったと言われるこのグレッチオの修道院で、詩人はゆっくり腰を落ち着けて、フランチェスコ的精神について考察しているので、取りあえずその紹介をさせて頂く。

詩人は修道院の食堂で一人の修道士が、あやまってテーブルの下に落したパンに、“まるでゆるしを乞うかのように”そっと口づけするのを見る。人に全命を与えるパンに対する、この古くからの美しい習わしに表われている畏敬の念は、あらゆる存在の価値に対する畏敬につながるものだが、これこそ真にフランチェスコ的と言えるものである。フランチェスコは生きとし生けるものはもとより、太陽や月、風や雨、石や火のような自然のエレメントすべてを生命あるものの如くに愛し、体を洗った水が汚いもののように投げ捨てられるのさえ我慢がならず、人に踏まれないような所へそっと撒いたと言われる。ヨルゲンセンはここで、フランチェスコ精神の極みは生命を促す精神であると言っている。

フランチェスコ精神の顕著な特徴として次に挙げるべきものは、清貧と遁世への志向である。聖者の精神を継ぐ修道会の人々も、時として、金銭は一切持たず、粗衣をまとい、生命をつなぐだけのパンしか食べず、地面にそのまま寝るといような、フランチェスコその人の余りにも厳しい禁欲の生活をもう少し緩和したいという、極めて人間的な衝動に駆られ、聖者の定めた会則を変更して、より穏やかな生活を営もうと試みる事があった。しかしその傾向が支配的になるたびに、フランチェスコ会の真の精神的伝統に連なる人々が立ち上り、今一度創立当初の熱意を持って理想を高く掲げようと、人里離れた所で神へ

の愛の他は何物も持たない生活を送る権利を、教皇に対して要求するのだった。人間の価値がその物質的富によって測られ、無一物の者はそれだけでうさん臭く思われるようなこの世において、こうした清貧の権利のための戦いが行われたとはとうてい信じ難いが、実際にそのような人々が存在したのである。現に、フランチェスコ精神の花と呼ばれる聖キアラ（クララ）は、頻死の床にあって尚、サン・ダミアノの彼女の修道女達のために清貧の貴い特権を確保しようとして戦い、教皇イノセント四世がついに請願を許可するまで息を引き取らなかった。かくてこのグレッチオも、清貧の権利のための戦いを経て、真のフランチェスコ精神に徹した修道院とあって、こゝでの生活は単純素朴、祈り、労働、最小限の食事、相互愛の純粹な喜びのうちに、あるいは、“フランチェスコによってキリストのうちに一つになる”喜びのうちに営まれているのである。

このグレッチオの修道院は、聖ボナヴェントゥラがフランチェスコ会総会長の時代（1257－1274）に建てられたものである。ここには聖フランチェスコの住んでいた岩穴の跡もあるが、聖ボナヴェントゥラの先任者、パルマの福者ジョヴァンニが32年間籠って祈り、断食し、罪の償いをした洞窟もそのまま残っている。それは岩に嵌め込まれた巨大な貝殻のようで、人が中で直立できるほど高くなく、どうして眠ったのかわからないほど狭い。詩人はこの岩穴の中で、32年間福者の寝床であった冷たい固い岩を見つめ、その岩の上に建てられた小さな礼拝堂のベンチに掛けて、この老隠者の魂に想いを馳せる。幼い頃から既に清らかな宗教心の芽生えを見せていたこの魂は、長ずるに及んで当時の全教養を身につけ、パルマ大学を卒業して文学博士の学位を得た。しかしそれほどの教養も学識も、この清い魂を満足させなかった。ある日のこと彼はすべてを捨てて、フランチェスコ会の粗末

な灰色の修道服を着せてもらう。

「新しい兄弟を指導する人にゆだねられると、彼はたいへん霊的で信心ふかくなったので、神についての話を聞くとよく、その心は火のそばのろうのように溶け、また大きな甘美と至福に満たされたので、どうしてもじっとしてられないで、立ち上って、霊に酔ったように走り去り、霊が彼をかりたてるまにまに、庭や森をかけまわった。」

これは同名の別の聖者について語られた言葉だけれども、この話をバルマの福者に当て嵌めても決して間違いではあるまいと、ヨルゲンセンは書いている。なぜならば、神への奉仕がこの上ない幸福と喜びであることは、全フランチェスコ会の、中でも優れた人々の特徴だからである。生涯を通じて彼等は常に主にあつて喜び、“神に酔っていた”とさえ言える。聖フランチェスコは自ら、あらゆる喜ぶ者の中の一番喜ぶ者であった。

この無上の喜びは清い心と絶えざる祈りから生まれるものであるから、この霊的恵みにあずかるためには、常に心と体を貞潔に保たなければならない。このような徳を我がものとし、さらに堅固なものにするために、フランチェスコとその忠実な弟子達は隠者の庵や岩穴へ退いたのであった。フランチェスコは神の御旨に従って人々の魂を救うために、古の使徒のように各地を遍歴して宣教活動が続けたけれども、岩穴に隠れ棲む隠修士の生き方こそ彼にとって最も本質的なことであった。されば、世の常の人々には目も眩むような、フランチェスコ会の聖人達の天にも昇るばかりの喜びは、厳しい苦行の生活から咲き出た美しい花なのである。小礼拝堂の祭壇の前での法悦の境地は、礼拝堂の後ろの岩穴での自己否定と世界放棄の褒美なのだ。

現代のキリスト教徒は安楽な暮しに慣れ切っているので、快適な生活を断念して、風雨に瀑された身を伸ばす余地もない荒い岩穴で、一度として人里に降りることなく32年間も祈

りに明け暮れるなどということはもはや思いも及ばないし、キリスト教の絶頂まで、すなわち“聖性のまばゆいばかり白い高峰まで登りつめる”ことは、これはもう我が身とは全く無縁の事柄だとしか考えないけれども、聖フランチェスコと最初の弟子達がこのような岩穴に籠ったのは、まさにこの聖性の実現のためであった。

“山は常に神を求める人の隠れ家である。”とヨルゲンセンは言っているが、イタリアの山の性格にはどことなく人を隠者の生活に誘うところがあると言う。フランチェスコも繰り返し山へ逃れた。今この旅人は、フランチェスコが1223年に聖霊の助けによって修道会の会則を書いたと言われるフォンテ・コロンボで、この荒寥たる山の厳粛さを実感する。彼はこのような孤独な山の洞窟の中で苦行と祈りの生活を送った三人の聖者、ヌルシアのベネディクト、アッシジのフランチェスコ、ロヨラのイグナチオが、いずれも等しく肉を懲らしめ霊に服従させる禁欲の生活を送った、真にキリストとパウロの後継者と呼ぶにふさわしい人々であることに思いを致し、ぶなやしでの若葉に包まれたこの春山のイタリアは、古来詩人が歌い画家が描いた華麗なイタリアではなく、農夫が働き修道士が祈るイタリア、仕事着を着たイタリア、贖罪の衣を着たイタリアなのだと考えるのだった。これがフランチェスコのイタリアなのだ。わたしはこれがわかって十分幸せであり、他のイタリアを知ろうとはさらに思わないと。

ところで、フランチェスコが布教を始めた頃のリエティ谷は、神への畏れと愛は消え、礼拝も懺悔もおおざりにされ、世俗の道と肉欲の園が大賑わいという状態であった。そこでアッシジの聖者の仕事は先ず、“欲望のきりのない悪い道”を閉ざすことに始まった。それは言葉の本来の意味での福音化——異教からキリスト教への改宗——を行うことであ

った。この地域で宣教活動をしていた頃の彼は、しばしば自己の罪の意識に苛まれ、これほど罪深い者に人を導くことが果して許されるのだろうか、深刻な自己不信に苦しんだらしい。行く先々の岩穴の中で彼はこのようなおのれを神の前に投げ出してひたすら祈り罪を悔いて救いを求めること切なるものがあった。リエティ谷のポッジオ・ブストーンの洞窟に入った時、彼はとりわけ激しい罪の意識に責めつけられ、身も世もあらぬ若悩の中から神に向って、「主よ、この哀れな罪びとをお憐み下さい！」と呻いた。するとこの荒寥たる山上に奇蹟が起り、「わが子よ、恐れるな、おまえの罪は許された。」という答が得られたのであった。この時を境にしてフランチェスコはキリスト教の核心に入った。なぜなら彼は、父と母、家と家族、金と物ばかりでなく、この時自分自身をも捨てたからである。この時から彼は神のものに、そして神が彼のものになったのである。

フランチェスコのこの洞窟はポッジオ・ブストーンの上5百メートル、平地から1千メートルの山腹にある。そこは今小さな礼拝堂になっているが、彼が隠れ棲んでいた頃にはフォンテ・コロomboのそれと同じく、蔽いかぶさる岩壁の他には屋根とてなく、小鳥のさえずりと谷川のせせらぎの他には聞えるものもないところであった。

人間が限りある現世で息が詰まりそうになる時、自分自身の心の中にも星辰の宇宙にも安住の地を見出せない時、その胸から奔り出る叫び、人間が深い弱さと悪の淵から「おゝ神よ、清い心をお与え下さい、新たな意志をお授け下さい」と天に向って呻く時、血のように噴き出す叫び、この生ける神への叫びなしには人間は救われぬ。「飢え渴くひとは幸いである」(マテオ5・8他)とあるように、善への飢えと聖性への渴きを持たないなら、我々はキリスト教の平和と慰めを得ることとはできないのだ。ヨルゲンセンはこゝでさ

らに、不正を喜ぶ悪い意志を殺して、その代りに真理を喜ぶ新しい意志を我がものにする、これが救いの道であると語っている。なぜなら、真理を喜べることは真の善のしるしであるからだ。

旅人はこの峻しい山を去ってアッジへ赴く。ここはもちろん聖フランチェスコの生地であるから見るべきものは多い。聖者の墓のある聖フランチェスコ大聖堂、若きフランチェスコが初めて、「わたしの荒れた家を建てなさい」という主のお告げを聞いたサン・ダミアノ聖堂、聖クララ大聖堂、カルチェリ修道院、リヴォ・トルト修道院、フランチェスコが自分の手で修復し、最後にそこで亡くなったボルティウクラ礼拝堂など。旅人は彼にとってすでに三度目のこの街で、馴染みの場所をもう一度残らず廻って歩く。しかし我々はこゝでのお堂めぐりは省略して、彼の巡礼の目的地であるアルヴェルナ山へ直行したいと思う。なぜなら、アベル・ボナールも言っているように、偉人は人々に及ぼした影響によって知るのではなく、その人自身において、あえて言えばその孤独において捉えなければならぬからである。フランチェスコをよく理解するには、彼について孤独な洞窟に行ってみなければならぬとヨルゲンセン自身も言い、さればこそ隠者の庵の巡礼にも旅立ったのである。私達も、フランチェスコの生涯のクライマックスとも言うべき聖痕の地へ足を運ばねばならない。

## II

1224年のことであつた。フランチェスコの余命はもう僅か2年という時である。彼はアルヴェルナ山に向つた。彼がトスカナのこの高い山に登るのは六回目で、そしてこれが最後であつた。この山はキウジの領主オルランド伯が、祈りにふさわしい場所としてフラ

ンチェスコに贈ったものであった。フランチェスコはこの山がいたく気に入っていて、山上の小聖堂で聖母被昇天祭（8月15日）を祝い、それから大天使聖ミカエルの祝日（9月29日）まで40日間の断食をするのが常であった。この最後の滞在の時にも、彼はいつもよりさらに熱心に断食し、祈り、自らの罪を償ったのであったが、9月14日の十字架称賛の祝日の朝、夜はまだ明けていなかったが、太陽の昇るのを待ち望んで東の方を向き、腕を上げ手をひろげ、燃ゆるばかりの熱烈さで祈りを捧げていると、ほの明るく明け初めた空から、六つの輝く翼を持った熾天使がひばりに襲いかかる鷹のように彼の上に舞い降りて来た。熾天使は十字架につけられた人の姿をしていて、二つの翼は頭上にのび、二つは飛ぶためにひろげられ、他の二つは全身を蔽っていた。フランチェスコはこの出現を見てひどく恐れると同時に、喜びと悲しみと驚きに満たされた。主御自身が親しく姿を現わされたことはこの上ない喜びであったが、十字架につけられた主を見ることは、言うに言われぬ悲しみを彼に起させたからである。そしてさらに、この異常な出現の仕方によって彼は驚嘆した。人間の苦しみは熾天使の不滅の霊と一つになる筈はないからである。しかしこれは、彼が肉体的な殉教によってではなく、内なる信仰の焰によって、十字架につけられたキリストと同じものにされることを彼が理解できるようにとの、神の特別な御旨によるものであることがこの時彼に啓示された。

この幻視が消えると、フランチェスコの心には神への燃えるような愛が残り、その体にはキリストの苦難の痕跡、すなわち手と足には貫かれた釘の跡、右の脇腹には槍によって受けた傷の跡が残ったのであった。

ビッピエナは雨であった。しかし詩人は、ここからアルヴェルナ山までの12キロの道を徒歩で行くことに決めた。白い霧の中に見え

隠れる山路の景色を楽しみながら登って行くが、目あての山が行手に顔を見せる頃から霧は再び雨となり、やがて滝のような降りとなる。この雨の中を濡れねずみになって、ビッピエナから歩くこと四時間、ついに修道院の門の前に立つ。そこには次のような厳かなラテン語の銘が読まれた。

「全世界にこれより聖なる山はなし」

ここの修道院では、24時間に二度修道士達は列を作って、フランチェスコが聖痕を受けた場所に建てられた礼拝堂に赴き、この大きな奇蹟について黙想することになっている。この行列に加わって聖痕の礼拝堂に膝まづき、古の聖者を偲んだ詩人は、この修道院のフランス人神父サミュエル師の案内で、フランチェスコが祈った洞窟、寝た別の洞窟、兄弟レオネがフランチェスコのためにミサをあげた山上の岩窟などを廻る。湿った谷底の岩壁の間に二人はしばし立ち盡くす。詩人は感じ入って言う。

「どうです——ここに住み、ここで祈り、ここに居るのです。毎日毎日、何週間も——きのうのような天気もよくあるのに。」

「そうです」と、神父は答える。「アルヴェルナ山の天気は、一年の大部分まるで冬みたいです。三か月かせいぜい四か月が夏で、他は雪と嵐と雨と霧です。アッジジから来た人の話ですと、アッジジで見たすべてのものは、アルヴェルナ山にくらべると、色を失い、つまらなくなってしまうそうです……アッジジはきれいで、快く、魅力があります。それはフランチェスコ精神の花です。でもここでは、フランチェスコ精神の深い根、そこから神に呼びかける深淵が見られます。ここでただ一ついえるのは——ぞっとする、ということです……そう、ぞっとします。」

フランチェスコが寝室にしていた岩穴は、狭い暗い通路が行き止まりになって四方を閉ざしている岩窟である。ひどく濡れていて暗い。ここで冷たい岩の板をベッドにして寝る

のは殆ど非人間的でさえある。ただ選ばれた者のみが、特に召された者のみが、あえて耐え得るものである。

アルヴェルナ山はフランチェスコ会のゴルゴタの丘であると言われる。キリストの磔刑がここで奇蹟的にフランチェスコの体に繰り返されたからである。この山で孤独に祈っている時ほどフランチェスコは神に近づいたことはなかったし、この山ほど彼の愛した山もなかった。彼がこれを最後にアルヴェルナ山を降りるという時に、そこに残る弟子達に告げた別れの言葉は、類なく美しく感動的なものである。

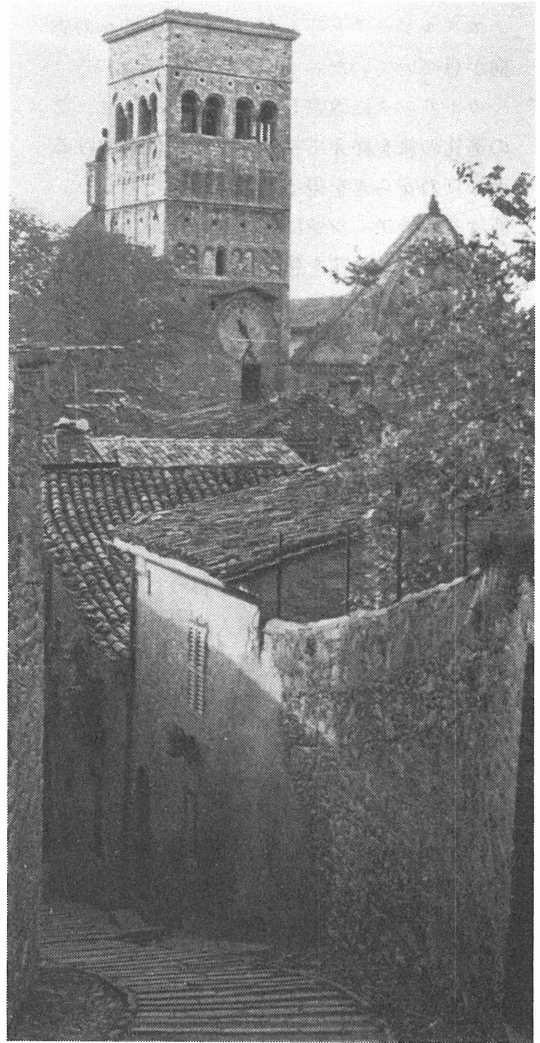
彼はろばに乗って山を降り、ボルゴ・サン・セポクロに向ったが、アルヴェルナ山を最後に見渡せるモンテ・カゼッラの頂きに着くと、灰色のろばの向きを変え、生涯で最も忘れ難いその山をじっと見つめ、釘に貫かれた右手で十字を切ってはるかなその山を祝福した。それから700年の後、このデンマークの旅人はビッビエナ市の前に佇んで、かなたの地平線に黒く聳えるアルヴェルナ山に別れを告げながら、裸足で粗末な修道服を着た小柄なアッシジの聖者が、悲痛な思いをこめてこう言うのを耳にするような気がした。

「さらば、アルヴェルナよ、わたしはもう二度とおまえを見ないだろう！」

## 結 び

わたしの前にはわたしの影  
わたしのまわりには静けさ  
わたしの上にはほの青い空高くに  
たえずさえずるひばり

ローマ平野の人気のない白い道に立って、今巡礼の旅を終えた詩人は、このひばりのように空高く舞い上らずにいられない己れの魂が、そのほの青い高みにおいて眼のあたり見たものをたたえて、限りない賛美の詩をうた



う。それは彼のあこがれの対象であり、彼がまさにこの旅において求めてやまなかったものであり、しかも今はもうこれ以上受け入れられないほどに与えられたものであった。それは、偉大なアッシジの聖者が使徒のように遍歴した古い町々、峻しい山々に刻み込まれたその足跡から立ちのぼる、気高い魂の香りであった。聖フランチェスコのガリヤと言われる、美しいウンブリアの穏やかな陽光の中に咲き出でた清らかな花、それがフランチェスコの精神であった。そしてその精神の根にあたる、深い山壁に隠された数々の暗い湿った岩穴……。詩人が訪れた所には例外なく、ポール・サバティエがいみじくも“聖性への

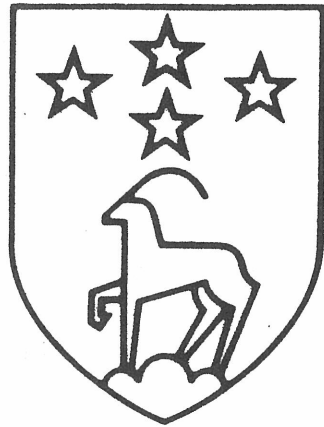
ノスタルジー”と呼んだ、熱烈な霊性への志向が息づいていた。

カトリックに改宗したヨルゲンセンは、この巡礼の旅を終えて初めて、この世における魂の真の安らぎを得ることができたと言う。彼はその後アッジに居を定めたが、フランチェスコ精神の花を慈んでも、その精神の深い根を忘れることはよもやなかったであろう。特にあのアルヴェルナ山の体験は、彼の“心の聖痕”として、永久に跡を留めたのではないだろうか。されば巡礼とは、真理の光に照らされてより正しく生きることができるように、そしてこの世界をより深く愛することができるように、生の根源に立ち帰ることによって、自己の存在の確かめを行う行為だとは言えないだろうか。「他国人であり旅人であるから」（ペトロ前、1、11）という言葉をフランチェスコは好んだ。この世における崇高な異邦人でありながら、彼ほどこの世を自分の世界と確信して、ありのままに愛した人はいなかった。オリーブがまめやかに実をつけ、糸杉が修道士のように不動の姿勢で祈っているフランチェスコの国に遊び、さらにあの実存の深淵そのものの岩穴の中で、畏れと戦きに身を瀑すことは、畢竟この愛を感得することと他ならない。

1981年8月  
(英 語)

### 訂正とお詫び

前号(31号)に掲載致しました推薦図書リストの中で、神達先生(数学)の3冊目、『「後世への最大遺物」 内村鑑三著』は坂入先生(独語)御推薦の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。



### 編集後記

今年も残り少なくなりましたが、皆様は、冬期休暇を迎え、一息されることと思います。教養図書館も12月は比較的静かな時期です。年が明けますと期末試験が迫り、例年混雑します。また閲覧証の発行を受けていない方、一度も利用されたことがない方、この機会に図書館の使い方に慣れておかれたら、いかがでしょうか。

今回は、伊藤幸子先生(英語)に J. Jørgensen 著『巡礼の書』をご紹介頂きました。請求記号は198.2237/F43です。ご一読下さい。

図書館運営委員の山根先生(哲学)がご病気で入院されました。一ヶ月ほどで退院なさるご予定と伺っておりますが、一日も早くお元気な姿をお見せ下さることを祈ります。

閲覧ニュース 32号

1981.12発行

発行責任者 小野 健 一

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里 1-15-1